

昭和39年夏。

広島から北海道、 バイク一人旅の記録



正岡 勝治

聞き書き マネキネコ (亀井典彦)

バイクツーリングという言葉もなかった時代、
20代のバイク好きが一人、
北海道をめざしてひた走った。
相棒は、ホンダドリーム CP77。



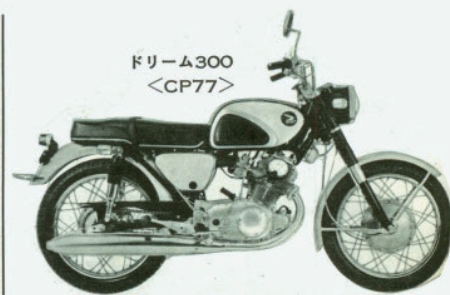
昭和39年夏。

聞き書き マネキネコ (亀井典彦)

一本松出版会

昭和13年3月生 広島市出身岡山市在住
21歳で自動二輪免許取得 バイクを手に入れた翌々年、単独で岡山から大阪、京都、東京、日光ツーリングを敢行。その4か月後には九州一周。結婚後、自営独立し、事業が軌道に乗るまでは趣味のバイクと距離を置き、80年代前半から、空白期間を取り戻すかのように怒涛のバイク三昧。現在に至る。20年近く続けている2時間ウォーキングは、「しっかりとバイクに乗るため」に、自らに課したトレーニング。

聞き書き・企画編集 マネキネコ (亀井典彦)
M 御大の新参友人。バイクを複数台所有しているが、最近購入して、一番よく使うのは中古のスーパーカブ (交番仕様)。バイクはもちろん、バイク好きな方の話を聞くのが、なにより楽しみな「聞きたがり屋」



ホンダドリーム CP77 (305cc)

序

(マネキネコ)

この旅を最後に、しばらくバイクを封印しようと心に決めた。
だから、区切りとなるバイク旅行をしておきたかった。
バイクで東京にも行った。九州一周もした。
なので、締めくくりは、北海道。

25日間の単独バイク旅を堪能した(正岡)

昭和39年(1964)。

東洋で初めて開催される東京オリンピックの年。

日本中の人々は、老いも若きも、言いようのない高揚感の中にいた。

戦禍をくぐり、都市部も、地方の主だった町も、焦土となって終戦を迎え、それからわずか20年。たったこれだけの期間で、私たちの先人たちは見事に日本を立ち直らせ、しかも高度経済成長を成し遂げ、先進国の仲間入りを果たした。

東京オリンピック開催は、戦後、日本が歩んだ約20年の足跡を、万人が共有しあう一大イベントであったと思う。

また、誰しもが、「明日は今日より豊か」であることを信じて疑わない、活力に満ちた日々だった。そんな時代風潮の中で、被爆地・広島から一人の青年がバイクにまたがり、一人旅を敢行しようとしていた。彼もまた高揚感の中にいた。

めざすは北海道。21歳で免許を取り、バイクの面白さに目覚め、一人で東京にも九州にも出かけたが、今回の北海道行は、これまでの旅とは違う、特別な意味があった。

今回の旅を終えたら、きつぱりとバイクを降りよう。

所帯を持つことが決まり、いずれ三十代で会社から独立し、事業を興したい。

事業が軌道に乗るまでは、仕事あるのみ。

そんな「内なる決意」を抱えての北海道バイク一人旅だった。

出発の日はいよいよの雨。長期休暇を許してくれた勤め先の上司、仲間に挨拶をした後、みんなに見送られてアクセルを回した。



長万部付近 (7/4)



ぬかるんだ道。撮影後に走り出したら、前輪が深く入り込み抜け出せなくなった。通りかかった車に助けてもらった（7/5）





帯広方面 (7/5)



帯広方面 (7/5)



オロフレ峠



阿寒湖からの帰りにパンク (7/7)



摩周湖から川湯温泉に向かう途中。
左に硫黄山。
土煙を上げて走るバスとトラック。(7/8)

広島 〜 青森

勤務先の会社から
1か月の長期休暇をもらった。
バイク好きの上司が
快く送り出してくれた。
出発の日は会社に立ち寄り、
みんなに挨拶してから出発した。



青森港に到着（7/2）

青森

6月29日 名古屋～伊豆、伊東

6時30分旅館を出る。熱田神宮へ向かう。名古屋から清水市、三保の松原、沼津、伊豆半島、修善寺、天城峠の道がすごく悪い。雨の中パンクした。修理に1時間を費やす。下田泊。

6月30日 下田～江の島

伊東から大島に渡る。三原山。夕刻、伊東に戻る。熱海、小田原、江の島泊。

7月1日 江の島～仙台

雨ときどき晴れ。江の島、鎌倉、横浜、東京、千葉。成田神宮へ。成田、潮来、鹿島灘、水戸。この間道が悪い。仙台に24時頃着。泊。

7月2日 仙台～青森

曇り時々雨。船から松島観光をしたかったが、悪天のため断念。青森をめざす。盛岡で雨。道に迷いつつ20時頃、青森駅着。連絡船にバイクを乗せることはできないので、フェリーを教えてもらった。港に行ってみると1日に1便しかなく、18時の便はすでに出港したあと。仕方なく一泊。

7月3日 青森

晴れ。18時の出船時間まで市内をぶらぶら。ついでにバイク屋さんで修理を依頼。バイク屋の主人に広島から走ってきたこと、これからバイクを北海道に持ち込み走る旨を伝えるとびっくりしていた。修理ができるまで時間がかかるので、近くの風呂屋に行くことをすすめられ、洗面器を貸してくれた。チェーン交換、後輪スプロケット交換。ポイントチェック。修理代4000円ほど。フェリー代1500円。

広島

昭和39年(1964)

6月27日 広島～京都

前日から雨。広島市内の勤務先に寄って挨拶ののち出発。大雨。竹原あたりでエアフィルタへの浸水が原因でエンジンストップ。修理して走り出す。大阪23時着。知人を訪ねるが不在だったのでそのまま京都へ。24時京都着。泊。

6月28日 京都～名古屋

京都から開通間もない阪神高速道に乗る。八日市の手前でエンジン停止。しばらく放置冷却してキックしたらエンジンがかかった。時速50キロで慎重に走る。八日市インターで下り、バイク屋に駆け込む。エンジンが焼き付きをおこし、ピストンリング交換。夕刻、修理が上がり、再び名神高速。関ヶ原で降りる。桑名から名古屋。泊。



完成間もない名神高速道路

正岡氏の旅行アルバムの1ページ目には名神高速道路の駐車場にたたずむバイクの写真が収められている。

我が国初めての高速道路、名神高速道路は、この1年前、昭和38年7月に、栗東一尾崎間71kmで開通した（全線開通は昭和40年（1965））。

ちなみに、東海道新幹線は東京オリンピックに間に合うよう工事が開始され、計画どおり昭和39年（1964）10月に開通。

我が国高速交通網の二大インフラは、ちょうどこの時期に開通したのである。



名神高速道路 京都のインターチェンジ（6/28）

相次ぐトラブル

ある程度は覚悟していたバイクのトラブルだが、出発初日に出鼻をくじかれた。

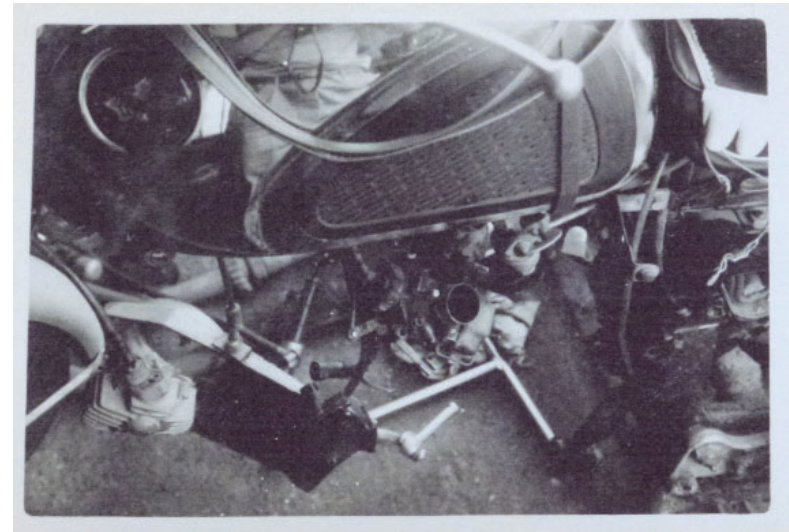
雨の中のエンジン不調。

さらにトラブルは続く。

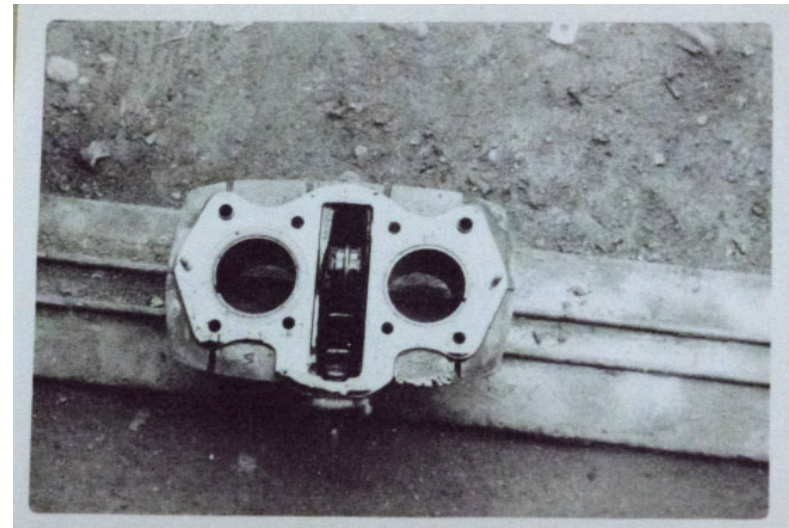
なかでも、名神高速道路を走行中にエンジン不調。焼き付きをおこしていた。

あわやバイク旅中断か・・・。

北海道に渡ってから、トラブルは続いた。



エンジンをばらしての重修理 (6/28)



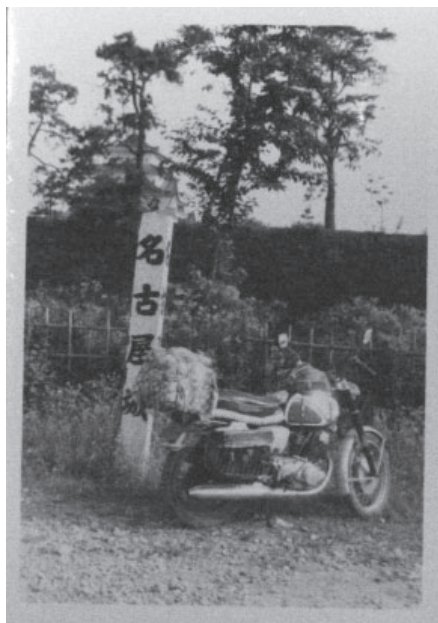
運よく滋賀県八日市にホンダSFがあり、そこに持ち込むとすぐに修理に取り掛かってくれた。分解してみるとピストンリングとシリンダーに5ミリくらいの隙間があった。



中山峠 (6/29)



関ヶ原インターチェンジ (6/28)



名古屋城 (6/29)





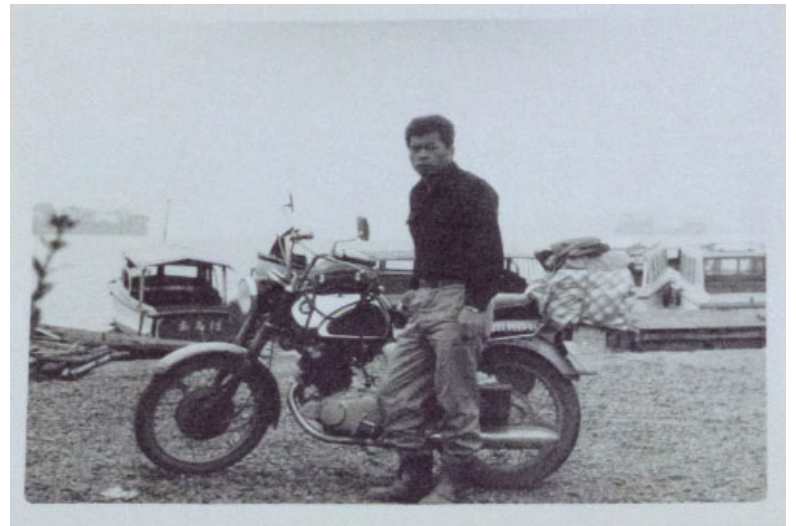
下田 (6/30)



伊東港 (6/30)



大島 (6/30)



松島 (7/2)

北海道南部

バイクを乗せることのできる
青函航路は一日一便。
夕方出航。
前日にバイクのメンテナンスを終え、
胸は高まる。



青森駅 (7/2)



青森駅前の旅館 (7/2)

7月6日 帯広～根室

晴れ。7時出発。帯広、釧路、根室。帯広からの道がものすごく悪い。あまりの上揺れ具合で荷台の荷物が落ちそうになる。釧路で鉄工所を探し、荷台とマフラーの間を金属の丸棒で溶接補強してもらう。費用 300 円。厚岸のあたりで道の脇がえぐられてドロドロの水たまりになっており、ハンドルをとられてはまってしまった。自力で引っ張り上げることができない。通りかかった車に引っ張り上げてもらう。根室に 18 時頃着。納沙布灯台に向かうが、道が悪い。20 時頃に根室に戻る。泊。

7月7日 根室～弟子屈（てしかが）

晴れ。根室、厚床、中標津、弟子屈、阿寒湖。エゾ松、トドマツが素晴らしい。弟子屈から摩周湖に向かう途中でパンク。摩周湖は霧。1 時間ほど展望台にいた。湖面が見えたのは 1 分ほど。弟子屈に戻り、泊。

7月8日 弟子屈～知床

雨のち晴れ。しとしと雨の中、出発。摩周湖はまたもや霧。硫黄山へ。川湯温泉。大鵬関の生家があった。屈斜路湖、和琴半島、美幌峠は霧、美幌～網走へ。道が悪い。網走、斜里、ウトロ、ここも道が悪い。アクシデント発生。なんとハンドルが折れてしまった。修理したいが鉄工所が見つからない。応急処置をしてそのまま走る。ウトロ着 18 時。泊。

7月9日 知床～温根湯（おんねゆ）温泉

晴れ。4 時に起床して知床を周遊する観光船に乗るためウトロ港へ。旅館が作ってくれた弁当を食べる。往復 5 時間の船旅。船が上下に 2 メートルくらい上下する。船酔いした。

7月10日 温根湯温泉、石北峠、大函、大雪山国定公園、層雲峡

7月11日 藻岩山（もいわやま）有料道路、白老

7月12日 長万部、大沼公園、函館山、グランド・函館港



7月4日 函館～札幌

晴れ。早朝に函館港に入港。船からトラックや乗用車を下すのに、一台一台、足場を作らないといけなかったので時間がかかる。一台のダンプカーの後輪が足場を踏み外した。さらに時間がかかった。長万部、洞爺湖、昭和新山、登別、苫小牧、千歳、20 時頃札幌着

7月5日 札幌～帯広

早朝から市内見学。時計台、北海道大学、大通公園、セドリックと接触事故。バックミラーが折れる。

青函航路

すでに青函連絡船は一日に何往復もしていたが、青函連絡船は北海道と本州の鉄道を連絡する役割を持つ航路。

それに対し、フェリー便は遅れていた。

ちょうど昭和 39 年頃に、青森の財界が青道フェリーを設立して就航しようとしたものの、免許取得ができず、やっと就航したのが昭和 42 年のこと。

当時はトラックや乗用車、バイクも、横付けした貨物船に、足場を渡して乗り込むスタイルだった。



フェリー（貨物船）



青森港での車両積み込み



船上にて



函館港



函館港につき、船から車両をおろす際、トラックの後輪が足場を踏み外した。修復するのに時間がかかり、下船が遅れた

国道舗装率 25%

これは北海道に限ったことではなく、日本の道はまだまだ整備されていなかった。

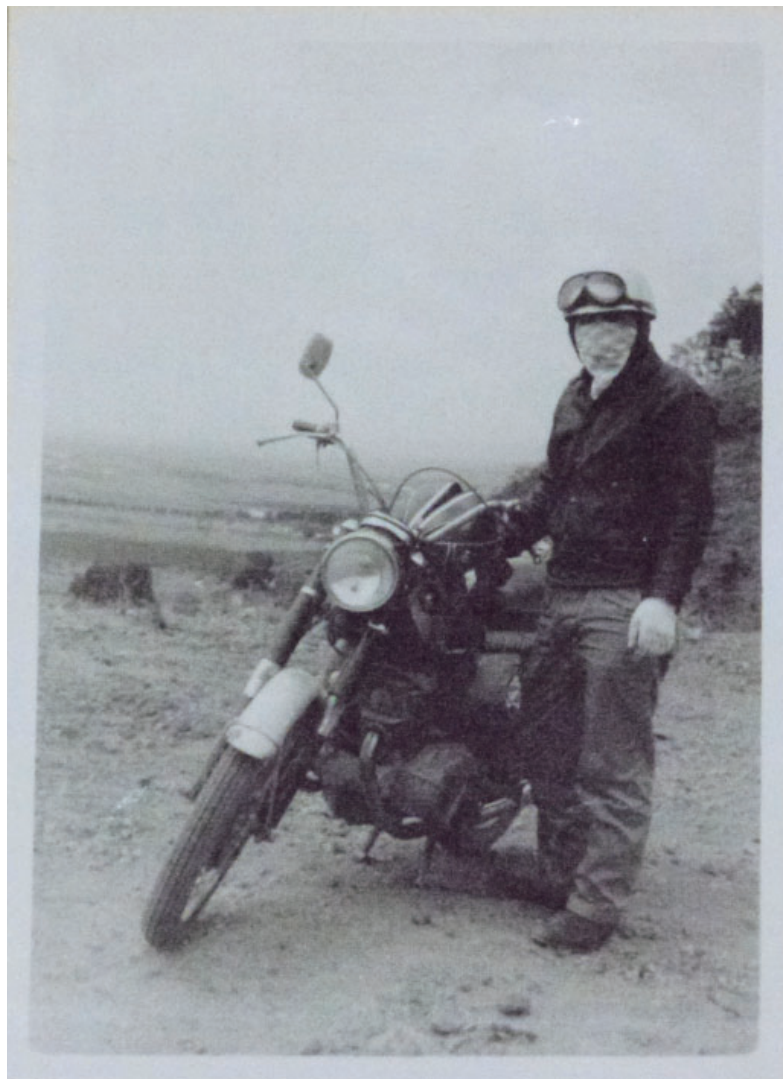
資料によれば、昭和 30 年代初め、国道でさえ舗装率はわずか約 25%。

自動車が自由に往来できる道路は約半分にすぎなかった（大林組資料による）。

北海道では、市街地を出ると未舗装の道が続き、ことにバイクは慎重な運転を要求された。現在のように「まっすぐ快適な道を疾走する」というイメージとはほど遠いものだった。



長万部あたり



ゴーグルとマスクが役に立った



弟子屈から摩周湖へ向かう道（7/8）





根室の手前



ハンドルが折れた

悪路は続いた。

ハンドルはとられる。

タイヤは滑る。

転倒もした。

轍につかまって自力で抜け出せなくなり、通りかかった車にロープで引っ張って助けてもらった。

転倒してハンドルが曲がる。

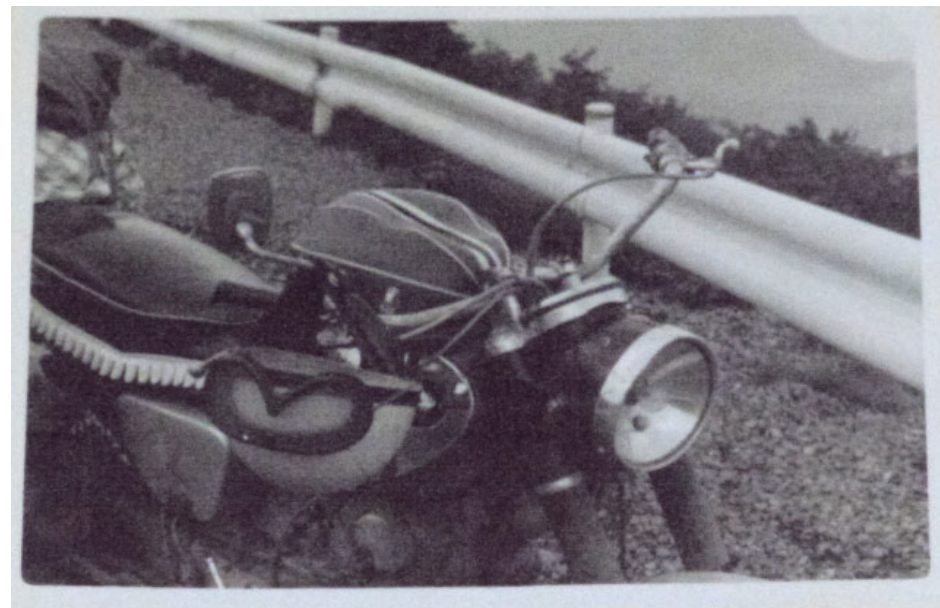
力任せで元に戻す。

また転倒。直す。

何度か繰り返しているうちに

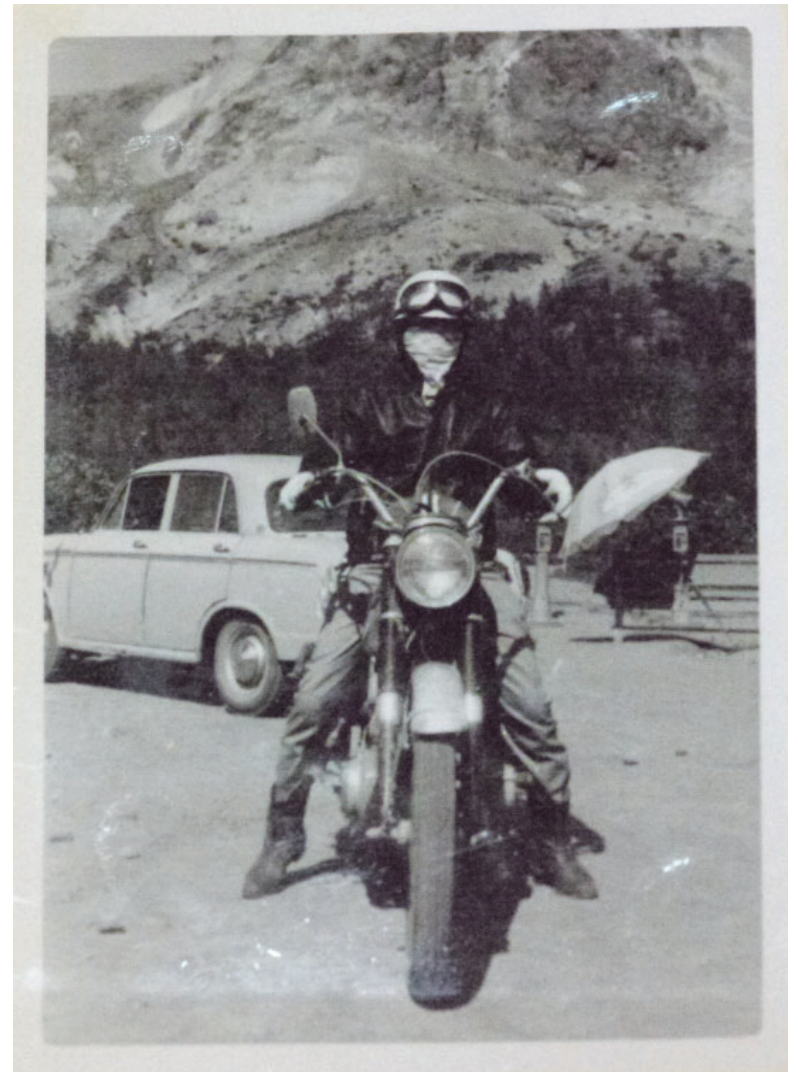
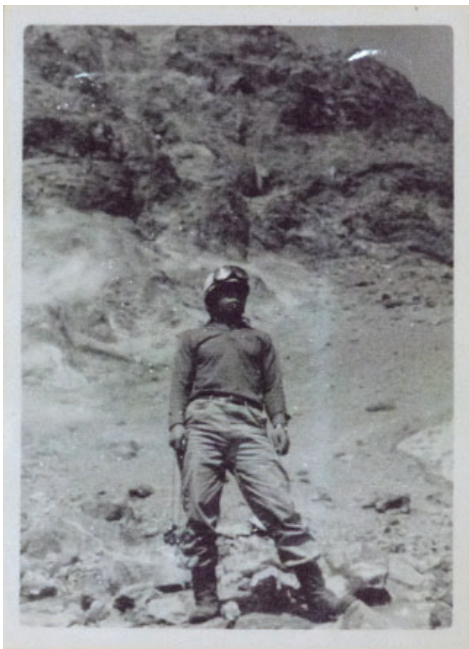
あろうことか右ハンドルが折れてしまった。

応急処置をしてそのまま走る羽目となった。





函館駅 (7/4)



昭和新山(7/4)



バイク乗りと出会い、函館から昭和新山まで一緒に走った。



北海道大学ポプラ並木



札幌 (7/4)



硫黄山 (7/8)



摩周湖 (7/7)



屈斜路湖、砂湯温泉 (7/8)



白老 (7/7)



藻岩山（もいわやま）有料道路（7/11）



大函（7/10）



屈斜路湖 池の湯温泉（7/8）



石北峠（7/10）



長万部駅 駅前の旅館伯（7/12）



函館山ロープウエー（7/12）



函館港（7/12）

バイクを船に積み込み、出航までまだ時間があるというので、周辺をぶらつき戻ってみると、なんと船が出港してしまっていた。
結局、自分だけ青函連絡船に乗り、青森でバイクとご対面となった。

帰路

(青森・福島・新潟・東京・広島)

- 7月13日 青森港、岩木山、酸ヶ湯（すかゆ）温泉、
雲谷峠（もやとうげ）、十和田湖
- 7月14日 福島
- 7月15日 磐梯朝日国立公園、スカイライン
- 7月16日 新潟
- 7月17日 川中島古戦場跡
- 7月18日 東京、鎌倉、羽田、横浜
- 7月20日 姫路 20時、広島帰着、晴れ



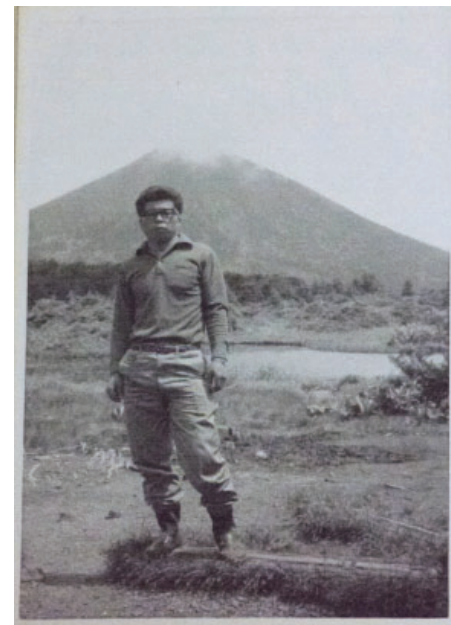
乗船（7/12）



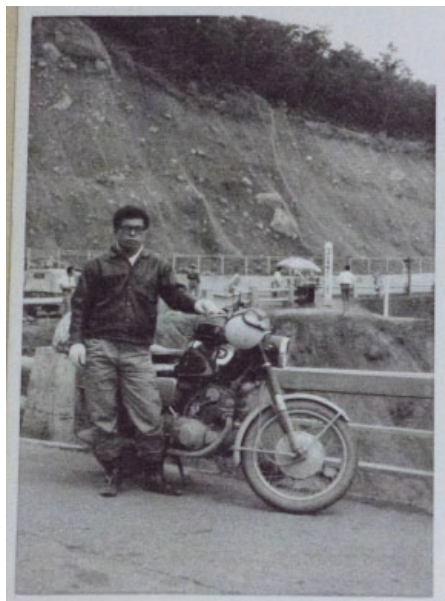
青森港 青函連絡船・十和田丸



マフラーの上に鉄棒が見える (7/15)



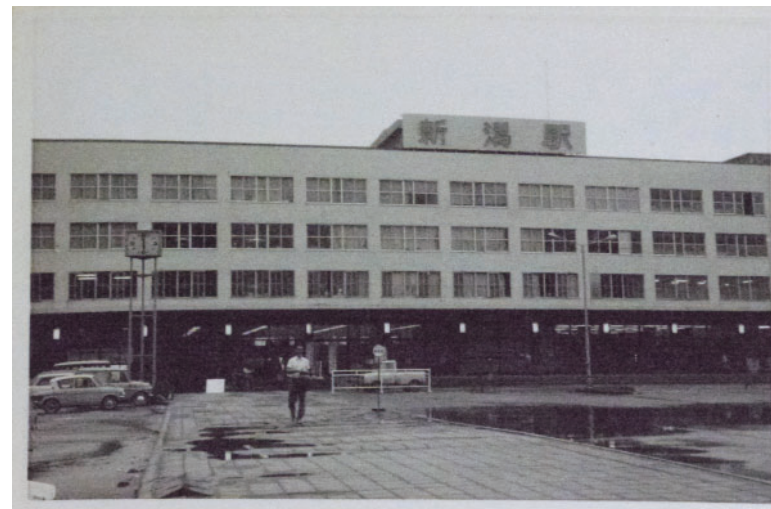
岩木山 (津軽富士) (7/13)



福島ドライブイン (7/15)



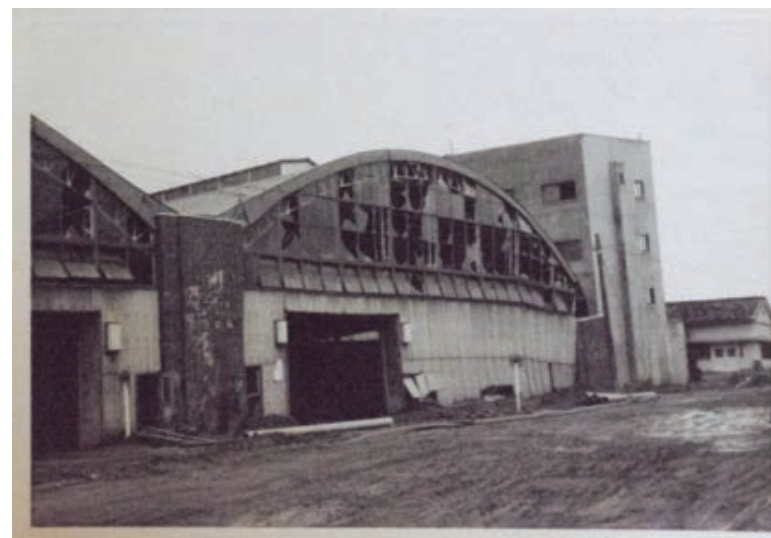
十和田湖 発荷峠 (7/13)



青森からの帰りは日本海側を走ることにした。新潟駅（7/16）



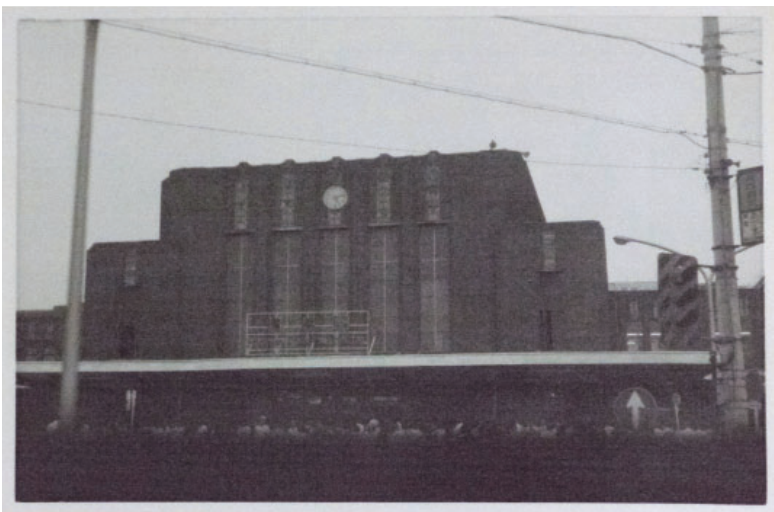
落ちた橋



新潟地震後の様子。昭和 39 年 6 月 16 日、新潟沖で地震発生。陸上の震度は最大で 5 程度。軟弱な砂質地盤の上に築かれた都市部で大きな被害を出した。液状化現象による建物や橋りょうなどが損傷。



東京オリンピック前の羽田国際空港



横浜駅





昭和 39 年 7 月 20 日午後 8 時 広島帰着 晴
アルバムの最後のページ



旅の締めくくりは姫路城へ (7/20)



正岡氏近影（20220822）

（2022年8月）マネキネコ 亀井典彦



写真の無断転載を禁じます

おわりに

あらためて正岡氏の行程をたどってみると、タフネスな走りっぷりに驚かされる。若かったとはいえ、真夜中もバイクを走らせる強靱な体力。しかも、ただ走るだけでなく、道中、あちこちの観光名所にも立ち寄り、カメラに収めている。この意欲的な走行スタイルはいまも変わらない。フットワークよく、あちこちに大型バイクや年代物のスクーターを走らせている。

2022年8月。正岡氏は再びバイクを伴って北海道の地に降り立つ。バイクを伴っての再訪はじつに58年ぶり。あの頃同様、気持ちを高ぶらせてその日が来るのを待っている。ご安全に。



思いの詰まった写真は、2冊のアルバムに収められている。